

神学校日 説教 「喜んで迎えなさい」 要旨

岩坪 彩 神学生

日本キリスト教団藤沢教会 2023年10月8日

ルカによる福音書 19:1-10

今日与えられた聖書の箇所には、ザアカイと主イエス様との出会いが記されています。そして、イエス様に出会ったザアカイは、イエス様を自分の家に迎え、そしてザアカイの生き方が、イエス様との出会いによって変えられていきました。今日、神学校日の礼拝にあたり、わたし自身のイエス様との出会い、そしてイエス様によって導かれ、備えられた歩みについて、証しさせて頂きたいと思います。

私は、長崎県の出身で、クリスチャンホームに生まれました。祖父の代からのクリスチャンホームで、家族は日本ナザレン教団の諫早教会に通っていました。しかし、幼児洗礼は「成長した後の私の意思を尊重したい」という両親の意向で受けていませんでした。

やがて、ミッションスクールである活水中学校・高等学校に6年間通いました。高校時代は英語を専攻し、将来は英語を使って仕事がしたいということを漠然と思い描いていました。しかし学生生活を通して、神様はどのような方であるのかを考えるようになりました。そのような中、宗教主任の先生に勧められ、当時通っていた長崎古町教会で、2017年、高校二年生のイースターに洗礼を受けました。教会員として交わりの中で生活することで、神様がどのような方であるか考え、また、変わるのではない自分自身の中心としてイエス様を据えたいという思いが与えられたためです。

高校卒業後は、幅広く学問を学ぶことが大切なのではないかという担任の教員の勸

めもあり、青山学院大学の教育学科に進学しました。大学時代は青山キリスト教学生会という大学公認のキリスト教系サークル、教育学科の推薦会である青山みどり会に属していました。同じ会のOBOGや学生たちから、各々の教会生活や信仰体験を聞くことができ、有意義な学生生活を送ることができました。

このような学生生活の中で、私自身の召命観や信仰について考え直すきっかけとなった出来事として、二つのことがあります。

一つは、高校二年生の時に参加した青年大会「リフォーユース 500 ユースカンファレンス」です。この合宿を通して、他者のために祈るといふことの難しさを痛感しました。また、自分がいかに自己中心的な信仰態度であったかを知り、改めるきっかけにもなりました。

二つ目は、私が大学三年生の時に開催された青山みどり会のクリスマス会です。このクリスマス会を通して、「どのようにしたら、どんな人とも神様の恵みを分かち合うことができるか」といふことの一つの答えを得られたと思います。同時に、「いろいろな人に神様の恵みをわかりやすく伝えるにはどうしたらいいか」といふ大きな課題が生まれた出来事でもありました。

こうした経験から、神様のことを知らない人にも「このようなお方である」と伝え、共に祈れるような人となっていくことが、クリスチャンホームに生まれ神学生と

なった自分に与えられた召命なのではないかとの確信を与えられました。

神学生として学び、神様とはどのようなお方かということ、キリスト教の信仰の理解をより深め、自分が聖書を通して受けてきた恵みを、子供たちや学生たちに「イエス様のことを伝える」という形で分かち合い、神様の恵みを多くの人に宣べ伝えていく者になりたいと祈り励みたいと思っております。

今日の御言葉に、あらためて目を向けてみたいと思います。

ここに出てくるエリコという町は非常に裕福な土地として知られていました。その街の徴税人の頭はザアカイという人でした。徴税人は当時の神とイスラエルの同胞に対して不誠実な人々と揶揄され、また異邦人の圧制者とコネクションがあることから民衆に憎まれていました。その頭であるザアカイは、想像するに大変なお金持ちであったはずですが、しかし、町中の嫌われ者で、居場所などなく、ひと時も心が休まることはなかったことでしょう。

このようなエリコの町にイエス様がおいでになったという知らせは、町の人々を大いに喜ばせたに違いありません。ザアカイもそのような一人でした。イエス様がどんな人なのか気になって気になって、仕方ありません。ザアカイは自分の体裁など気にせず、イエスを見るために走って先回りし木に登ります。町中の人からその様子を笑われても、陰口を言われていても気にしません。何としてでもイエス様を自分の目で見たかったのです。ザアカイの上った木の前にイエス様が来られました。すると、

「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」なんと、イエス様が自分を呼んでいるではありませんか。

信仰とは、私たちのもとを訪れてくださり、私たちに語り掛けてくださるイエス様を、ザアカイのようにお迎えすることです。イエス様がザアカイの家を訪ねること、ザアカイと共にあることを望んでくださっているのです。

この直前には、目の見えない人の癒しの出来事が記されています。実は、この目の見えない人の癒しの出来事と、今日のザアカイの出来事には共通しているものがあります。目の見えない物乞いは「目が見えるようになること」を、ザアカイは「イエスを見ること」を望んでいました。目の見えない人もザアカイも、いずれも「見る」ことを望んでいるのです。そしてどちらの物語でも、群衆は見ることを望む人を妨げる障害物の働きをしていました。

けれども、ここで目の見えない人も、ザアカイも、共に、イエス様を見るという恵みを与えられます。それは、イエス様が彼らのもとを訪ねてきてくださり、イエス様こそ、彼らに目を注いでくださったという、主の恵みに基づいているのです。

イエス様が、ザアカイの家にお泊りになる、人々から罪人だと言われていた者の家にお泊りになるということは、イエス様が当時の慣習を打ち破られたことを示しています。そんな罪人であるザアカイの家に主がお泊りになるということは、まさにイエス様が、その仲間に加わることをさします。今群衆は、イエス様が神の国の業を行っているのを見て不平を言います。見てい

るものを見る目は幸いだと言われているのに、実は「見ても見えない」でいるのです。

ルカ福音書のテーマの一つに「自分の罪に気が付くこと」があります。この章の前にも、罪に気が付くことについて述べられていました。聖書における罪は、神様に背いた人間の姿に気づかせます。私たちの罪が、わたしたちを愛してくださる神様との関係を損なわせ、また人間同士の関係をも破壊していきます。そのことに気が付き、人間はイエス様が必要だと信じ尋ね求めるようになることを神様は望んでおられます。そのために、御子であるイエス様をお遣わしになったのです。

ザアカイの喜びに満ちた応答に対し、「人の子は、失われたものを探して救うためにきたのである。」とイエス様は救いの宣言をされます。

ルカ福音書の15章には失われたものを探す神の姿が、当時の人々にも想像しやすいようなたとえ話を用いて語られています。ドラクメ銀貨を探す女性、99匹を野原に残し、見失った1匹の羊を探す良い羊飼い、放蕩息子を喜んで迎える父という様々な姿に置き換わり、失われたものを何としてでも見つけ出しご自分のもとに帰るように言われる神様の愛のお姿が描かれています。イエス様は失われた神との関係を取り戻すために来られたお方です。

ザアカイは喜んでイエス様を迎えました。イエス様が来られることは喜びであるのです。そのことはルカ二章の羊飼いへのおつけではっきりと言われております。ルカによる福音書2章10節から11節には、

「恐れるな。わたしは民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日、ダビデの町で、あなた方のために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」とあります。ここに、イエス様の誕生、主が来られたということ、それは「民全体に与えられる大きな喜び」であると聖書は語っています。まさに、このクリスマスの喜びを、ザアカイは経験したのであります。

イエス様は、罪を犯したわたしたちさえも救うために、そして、人々から『あいつは罪人だ』と指をさされたようなザアカイ、人々の交わりから退けられ、追い出された者たちさえもお忘れになることはありませんでした。ザアカイがイエス様を見たいと思う以上に、イエス様もザアカイのことを捜していたのです。

「急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」イエス様は私たちのことも捜して救いたい、神さまとの失われた関係をとりのどしたいと心から願っておられます。私たちもザアカイのように神様の恵みに満ちた召しに応答し、喜んで心のうちに神様をお迎えしたいと思っております。